

# 世界史探究の授業デザイン 「モンゴル帝国と元」

梨子田 喬

## 世界史探究では

どのような授業が求められているのか

「宋の社会とモンゴル帝国の拡大」の単元で、現行の学習指導要領解説と、新学習指導要領解説を比較してみる。両方から抜き出してみると「(内陸アジア諸都市のネットワークを掌握し、)朝鮮半島からロシア平原に及ぶ広大な地域を支配するに至った過程」「元が(中国の)南宋を滅ぼしてからは、海域のネットワークをも支配下に入れ、ユーラシアを海域と内陸で循環する交通・交易体系をつくり上げたこと」「宋から元にかけての仏教僧の交流や大陸と日本との貿易(日宋貿易)が活発になったこと」など文言までほぼ同じである。そのため「具体的な学習内容は現行の学習指導要領とかわっていない。いままで通り授業をすれば良いのだ」と思われがちであるが、そうではなく、これは「学習内容の削減は行わない」という改訂の方針により内容的変化が小さく見えているにすぎない。他方で、「何を学ぶかではなく、何ができるようになったか」という資質能力の育成のための歴史教育として大きなモデルチェンジがなされており、学習内容を学ぶことにとどまるのではなく、学習を通して資質能力を磨くことが目標として設定されている。そのため、次期学習指導要領は、主題の設定や問いの表現など授業の設計の仕方に詳細な指示があるのが特徴となっている。

以上を踏まえて、「宋の社会とモンゴル帝国の拡大」の単元から、「モンゴル帝国と元」の授業実践例を考えてみる。

## 学習指導要領の求める授業デザイン

(a)宋の社会とモンゴル帝国の拡大を基に、(c)諸地域の交流や広がりに関わる諸事象の背景や原因、結果や影響、事象相互の関連、諸地域相互のつながりなどに着目して、(d)主題を設定し、それに応じた「小項目全体に関わる問い」を学習上の課題として生徒に提示する。この問いを踏まえて(e)中国社会の特徴やモンゴル帝国が果たした役割を多面的・多角的に考察し、表現して、(b)海域と内陸にわたる諸地域の交流の広がりの構造的理解に至る。

新学習指導要領では、小項目内において身につけるべき「知識」や「思考力・判断力・表現力等」に対して、「アの(a)を基に、イの(c)に着目して、イの(d)を設定し、それに応じた「小項目全体に関わる問い」を学習上の課題として生徒に提示する。この問いを踏まえてイの(e)を考察し、表現して、アの(b)の理解に至る。」というように構造化されており、それを「宋の社会とモンゴル帝国の拡大」の単元の部分に当てはめると上記の囲みのようになる<sup>①</sup>。ここで重要になるのが、主題に応じた「小項目全体に関わる問い」、いわゆる「単元を貫く問い」の設定である。この単元全体を貫く問いが、宋と元の両方に共通する学習内容について本質的な思考や考察をうながし、これが学習全体の見通しを形成し、振り返りの軸となっていく。

たとえば、「周辺民族と中華世界」を主題とし、宋と元の学習全体を貫く問いとして以下のような

ものを設定してみた。

北方民族は中華王朝と対峙し、その発展を妨げたというイメージが強い。しかし、むしろ周辺民族がいたからこそ、中国は発展したともいえる。それはどういうことか。

この問いに、もちろん正解はない。この問いは、学習者の課題意識を形成し、単元を貫いて生徒が粘り強く考察を続けていく一筋の道のような役割がある。「むしろ周辺民族がいたからこそ」という逆説的な視点によって、学習者が、遼・西夏・金・モンゴルといった周辺民族を、王安石の改革・中華思想の形成・南宋の江南開発・士大夫の動向など中国の政治・文化・社会の様々な諸相と関連づけながら学習する仕掛けとなっている。

この問いに対する仮説を、「宋の社会とモンゴル帝国の拡大」の毎回の授業の最後に、その都度振り返りとしてアンケートフォームを使って入力させる。入力させたものを、最後に一覧にして、学習のなかでこの問いに対する仮説がどのように変容したかを認識させ学習の自己調整をさせるとともに、その変容の過程を「粘り強く取り組む態度」として主体的に学びに向かう力の評価として見取することができる<sup>②</sup>。こうした「単元を貫く問い」は、教師が一方向的に与えるものではなく、中項目「C（1）諸地域の交流・再編への問い」で生徒たちがつくった問いから導いてくることが望ましいだろう。

### 「モンゴル帝国と元」授業案

では、1時間の授業構成を考えていく。授業の切り口とするのは、モンゴル人は侵略者であり文明の破壊者だという先入観である。こうしたイメージを反転させ、実はモンゴルの支配が歴史にとって重要な役割を果たしたことを考察させる。元とモンゴル帝国の性格の違いに着目し、「世界史

にとってモンゴル帝国はなぜ重要か」「中国史にとって元はなぜ重要か」、という2つの視点からジグソー法を用い考察していく。

#### ①導入

導入として、その征服過程を地図で簡潔に説明し、文明の破壊者としてのモンゴル像を紹介する。たとえば、ロシアの『ノブゴロド年代記』には「われわれの罪のため、正体不明の諸族がやってきた。彼らが何ものであり、何処から来たか、どのような言葉をつかい、何族に属し、如何なる信仰を持つかを誰も知らない」とあり<sup>③</sup>、西欧では地獄を意味するタルタロスと結びついてモンゴルの恐怖は増幅して伝わった。イギリスのマシュー・パリズ『大年代記』では、モンゴル人は「犬・人の肉を」むさぼり食うとして挿絵とともに野蛮さが強調されている<sup>④</sup>。また、フラグの遠征ではバグダード攻城戦で多くの人が虐殺されたうえに、知恵の館が破壊され多くの書物が消失したといわれている。中国では、謝枋得の『豊山集』に「我が大元には人に十等あり。……七は職人、八は娼婦、九は儒者、十は乞食。賤しきものなり。賤なるもの、国に益なきものなり」（筆者訳）とある「九儒十丐」が有名である。こうした様々な史料で描かれるモンゴルの姿から、現代のフランスの中国学者ジェルネは「全ての文化に叛逆し」「中国精神に幻滅を与えた」「中国の歴史に重大な挫折を与えた」とまでいう<sup>⑤</sup>。

こうした記録から、モンゴル人は、文明の破壊者であったという印象がつくられているが、それは本当だろうか。この歴史観を疑いながら、モンゴル時代が中国史、世界史にとってどのような役割を果たしたかを考察していく。

#### ②展開（2人1組のジグソー活動）

2人1組のペアをつくり、そのうえで各ペアから1人ずつあつめてAグループとBグループにわかれさせる。それぞれのグループでは以下のような活動をさせる。

13世紀はモンゴルの世紀といわれる。しかし、そのモンゴルの征服活動と支配は文明の破壊、富の搾取などマイナスイメージとしてとらえられがちである。本当にそうだろうか。これについて、世界史におけるモンゴル帝国の役割を考えるAグループ、中国史における元の役割を考えるBグループにわかれ、以下の語句を用いて説明をつくりなさい。(「▼」は話の変わり目、「□」は1文字の空欄)

**Aグループ(世界史におけるモンゴル帝国の役割とは何か)**

1220サマルカンド、ブハラ征服、1227、オア□□の道を制圧▼パトゥの遠征、「□□の道」制圧▼フラグの遠征、ガザン=ハン、ムスリム×モンゴル▼三ハン国+大元ウルス、緩やかな連合体▼站赤、資料1・資料2(トコ?ドントコ?)、陳朝・元寇・ジャワ遠征、(□の道)、陶磁器や香辛料、「三つの道」の結節点が(トコ?)▼『世界の記述』、細密画、資料3、資料4、タタールの平和

**Bグループ(中国史における元の役割とは何か)**

1234(オゴタイ)、1260フビライ即位、のち大都建設、1271国号を大□と定める、高麗服属、1276南宋の都□□陥落、厓山▼南北分断終わった、大運河修復と海運、泉州(資料1・資料2)、站赤(交通網の整備)、□□を発行、▼交流、宗教色々、チベット仏教、イスラーム教、道教(全真教)、資料3・資料4▼資料1、色目人、染付、郭守敬、□□暦(イスラーム天文学)▼科挙、士大夫、庶民文化(せ?)、元曲、代表作3つ

活動のなかで用いる資料1～4は右上の4点である。

Aグループは、世界の一体化という視点からモンゴル帝国の役割について考察する。モンゴル帝国の征服活動は、「ホラズム=シャー朝を滅ぼす」、など個別の事例で学習されがちであるが、その征

これらの商人は、異教徒の国に住んでいるのでムスリムが来ると大喜びをし、「イスラームの国から来たのだ」と口々に言って、自分の財産の一部を喜捨してくれる。それで、その旅人は、彼らの商人の1人ほどにも金持ちになる。

資料1 イブン・バトゥータ『三大陸周遊記』「泉州」(前嶋信次訳『三大陸周遊記 抄』中央公論新社、2004年)

このサルコン(泉州)の港には、インドからやってくる船が必ず立ち寄り、香料類や各種貴重な商品をもたらすので、……

資料2 マルコ・ポーロ『世界の記述』(愛宕松男訳注『東方見聞録2』平凡社、1971年)

	中国を訪れた日本僧
1185～1275年(南宋)	161件
交替期	10件
1277～1370年(元)	350件

資料3 榎本涉「日元間の僧侶の往来規模」⑥

私はさらに旅して、……タルタル人の皇帝の国カタイに来った。そしてその皇帝を、教皇陛下の書簡でもって我らが主イエス・クリストのカトリック信仰に誘った。……ネストリウス教徒は、……私が教皇陛下の使者ではなく、密偵、魔術師、人々を惑わす者だと断言した。

資料4 モンテ・コルヴィノ書簡⑦

服活動はオアシスの道や草原の道などの交易路の制圧であり、広域におよぶ緩やかな連合体としての巨大国家のもと、海陸の交通網が整備され、人の往来や文化の交流、商品の交易がさかんになった。

Bグループは、中国史における元の役割について考察する。モンゴル帝国が南宋を滅ぼすと、平和の到来と交通網の整備により多様な人やものが往来するようになり、経済活動の活況や様々な宗

教上の交流がみられた。また、官僚として活躍した色目人やイスラーム文化の伝播は中国文化に新風を吹き込んだ。一方、元に仕えることをよしとしない士大夫も多く、彼らは在野で活躍し書画などの発展や庶民文化へ刺激を与えていった。

以上のようなことに気が付かせ理解させるように、活動中の生徒に働きかける。頃合いをみてもとの2人のペアに戻し、それぞれ学習内容をシェアさせ、モンゴル・元が、世界史において、中国史において果たした役割について表現し、考察させる。

### ③まとめ

まとめとして、西安の碑林にある1136年(南宋初)につくられたとされる『華夷図』(巻頭図版上)と1402年(元滅亡後)李氏朝鮮でつくられた「混一疆理歴代国都之図」(巻頭図版下)④の2つの世界地図を比較する。中国を中心に周辺民族が散りばめられた『華夷図』から、ユーラシア大陸とアフリカ大陸が取り入れられた世界地図への変化は、モンゴルの時代による世界の広がりや端的にあらわれたものといえるだろう。

最後に「単元を貫く問い」として、宋の学習から考察を続けている「周辺民族がいたからこそ中国は発展したのではないか」に対する自分なりの考察をアンケートフォームで入力させて授業は終わりとす。

## 探究活動で求められる資質能力を 養うための授業へ

新科目「世界史探究」では、E(4)「地球世界の課題の探究」における探究活動が充実するように年間指導計画を作成し、歴史総合の学び方、すなわち問いの表現、資料を活用した主題学習、対話的な学びによって、学習者が探究活動に必要な考え方や資質能力を身につけることが求められている。本実践においては、断片的な情報を関連づけながら構成していく力、単元全体を貫く問い

の「異民族があったからこそ中国が発展したのではないか」という逆説的な考え方、答えのない仮説をブラッシュアップしていくプロセス、モンゴルは破壊者ではなく創造者ではないかという光と影の二面的な考え方や、「中国史における元の役割と世界史におけるモンゴル帝国の役割」のようにフレームを変えて分析する、などがこれに相当するだろう。このような探究活動に求められる力や考え方は講義で教えて身に付くものではなく、日々の授業のなかで生徒自身が自分でやってみることを通して体得させるしかないだろう。

① 文部科学省「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編」(東洋館出版社、2019年3月) p.306を参照。

② 拙稿「授業デザインの時代へ」(皆川雅樹編著『持続可能な学びのデザイン——公共・歴史総合への架け橋 高校「社会科」授業実践』(清水書院、2021年)所収)。

③ カルピニ／ルブルク(護雅夫訳)『中央アジア・蒙古旅行記』(講談社、2016年) p.425。

④ 高田英樹編訳『原典 中世ヨーロッパ東方記』(名古屋大学出版会、2019年)。

⑤ 杉山正明『クビライの挑戦——モンゴルによる世界史の大転回』(講談社、2010年)。

⑥ 櫻井智美・飯山知保・森田憲司・渡辺健哉編『元朝の歴史——モンゴル帝国期の東ユーラシア』(勉誠出版、2021年)。

⑦ 高田編訳、前掲書。

⑧ 櫻井・飯山・森田・渡辺編、前掲書を参照。

(なしだ・たかし／岩手県立盛岡第一高等学校教諭)